畑ヶ田（はたけだ）遺跡（HD2016–1）　現地見学会資料

平成 29 年 5 月 20 日（土）　富田林市教育委員会文化財課

調査場所：富田林市若松町一丁目地内　　調査原因：市営住宅建て替え
調査期間：平成 28 年 12 月 12 日（月）～調査中　　調査面積：約 2,100 ㎡

1．見つかったもの

今回の調査では、古墳時代後期（６世紀後半）の竪穴住居、飛鳥時代（おおむね７世紀）から奈良時代（８世紀）にかけての掘立柱建物、溝などを確認しました。調査区を蛇行しながら南北方向にのびる落ち込み内や、当時の生活面の上に堆積した土層からは、多量の土師器（はじき）や須恵器（すえき）が見つかりました。また、当遺跡において初めてまとまった量の瓦が出土し、瓦葺きの建物が存在した可能性を想定できたこと、歯の出土から馬がいたことなどの新たな知見も得られました。

2．石製の帯飾り具について

注目すべき出土遺物として、石製の帯飾り具があります。飛鳥時代から奈良時代にかけての土器を多量に含む土層（現地表面から深さ約１m）から出土したため、奈良時代のものである可能性が高いと考えています。

楕円形の下辺を切り取ったような形で、「丸鞆（まるとも）」と呼ばれるタイプのものです。大きさは、縦約 2.3cm、横約 3.8cm、厚さ約６mm です。石材は淡い緑色をしており、表側と側面は丁寧に磨かれ、裏面には帯に取り付けるための穴が２箇所にあけられています。

このような飾り具を伴う帯は「銙帯（かたい）」と呼ばれ、８世紀初め頃に中国の唐の制度を取り入れたことで成立し、官人などが着用していました。当初は主に革製の帯に金属製の飾り具を取り付けたものでしたが、８世紀後半以降は、金属製に代わって石製のものが主流になるとされています。

3．今回の調査成果の意義

府内における帯飾り具の出土数は、平成 14 年に行われた集成作業の時点で 162 点（うち石製は 73 点）とされています（参考文献１）。市内では、金属製が新堂廃寺跡、石製は中野遺跡、錦織南遺跡で出土しています。傾向として、墳墓や寺院以外で出土する場合を除き、一般的な集落ではなく官衙（かんが）的施設（例えば地方の役所などの公的施設）の存在が想定される遺跡から出土することが多いようです。

今回の調査地近辺では、これまでにも飛鳥時代のものとみられる陶硯（とうけん：陶製のすずり）や、神功開寳（じんぐうかいほう：765 年に初めて発行された奈良時代の銭貨）を入れた土師器のほか、一辺約１m もの柱穴で構成された大型の掘立柱建物が見つかっています。これらの要素は、一般的な集落跡ではみられないものであり、官衙的施設の存在を想定してきましたが、帯飾り具の出土はそれを補強する材料といえるでしょう。

また、畑ヶ田遺跡で展開していた建物群と、南河内で最古級の古代寺院とみられる新堂廃寺の存続時期が、ちょうど重なることを改めて確認することができました。この一帯が属していた石川郡については、中野遺跡に郡衙（郡の役所）が存在したとの見方が有力でしたが、今回を含む近年の調査成果は、それに再考を迫るものといえるでしょう。

参考文献１　奈良文化財研究所 2002『銙帯をめぐる諸問題』

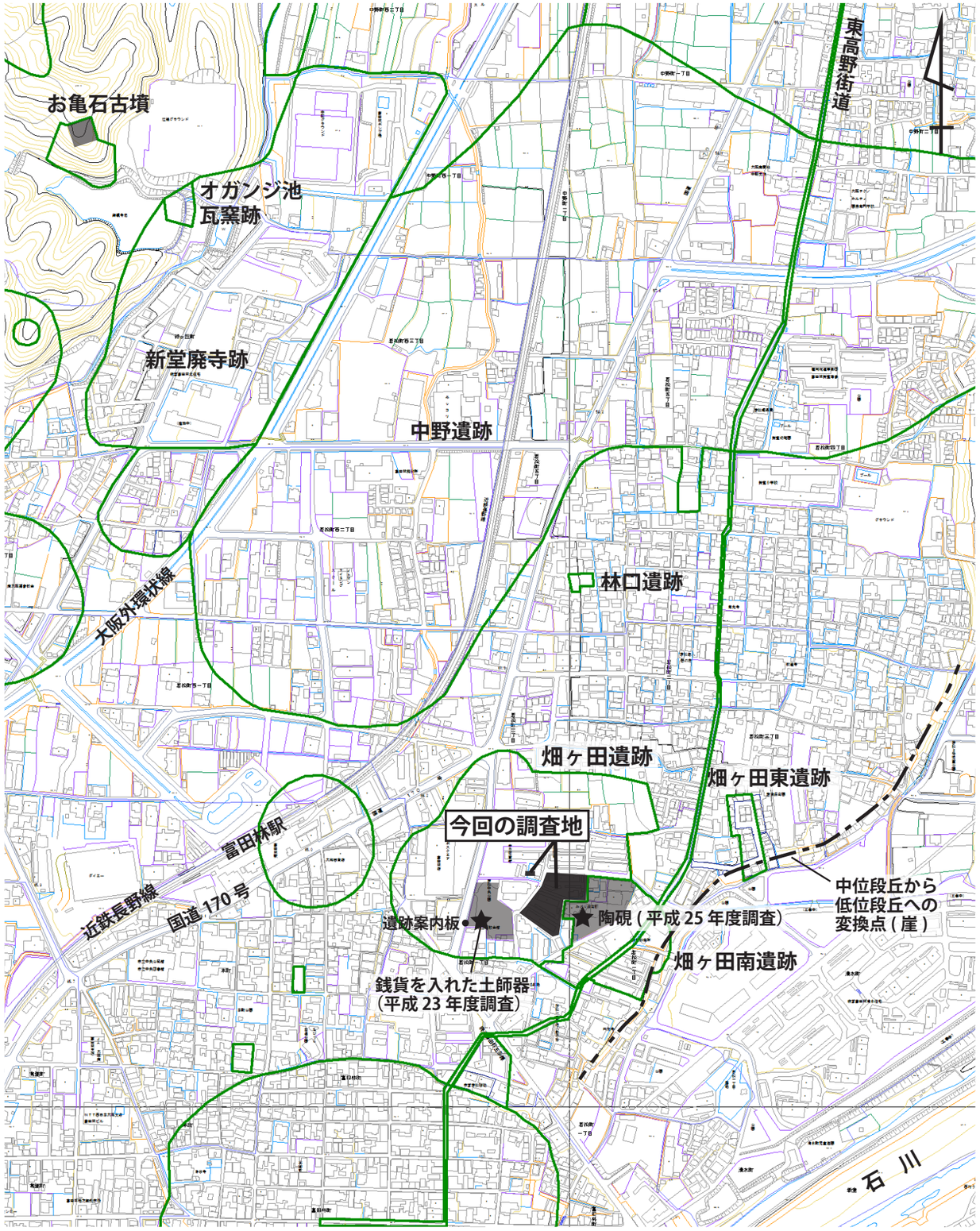

図１　今回の調査位置と周辺の状況（Ｓ＝1/6,000）

写真１　Ⅲ区 竪穴住居のようす（南西から撮影）

表側

裏側

写真２　Ⅰ区出土の石製帯飾り具（丸鞆）

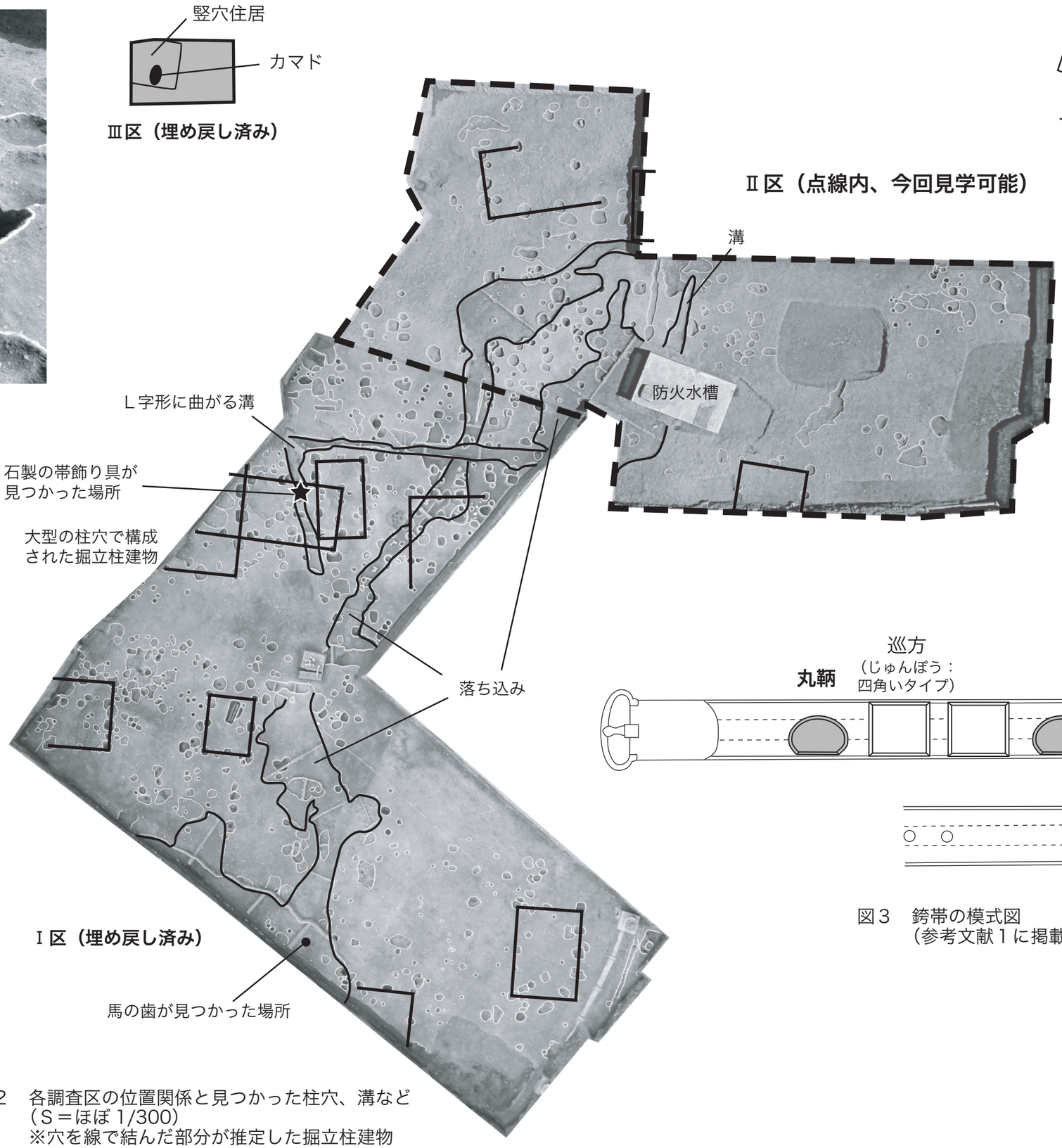

図２　各調査区の位置関係と見つかった柱穴、溝など
（Ｓ＝ほぼ 1/300）
※穴を線で結んだ部分が推定した掘立柱建物

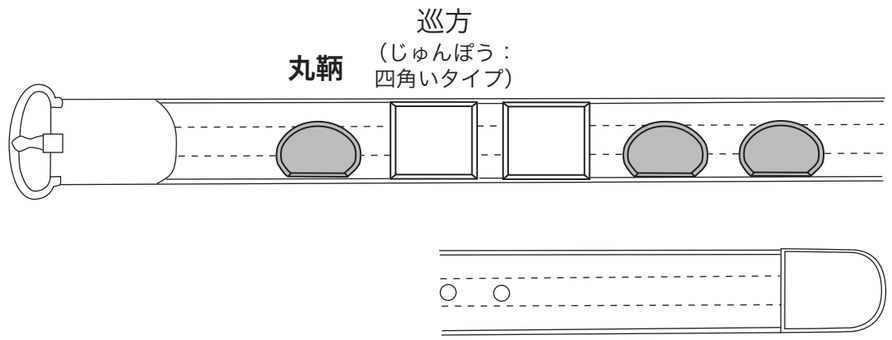

図３　銙帯の模式図
（参考文献１に掲載の図をもとに作成）